

集合住宅における中間領域に関する研究 その4

- 実験集合住宅 NEXT21・305 住戸における住み方から見た中間領域の意義 -

集合住宅	中間領域	NEXT21	正会員	○土井脩史 * ¹	正会員	牛山あやか * ⁴
実験住宅	住み方		同	高田光雄 * ²	同	加茂みどり * ⁵
			同	近本智行 * ³	同	志波徹 * ⁶

1. 研究の背景と目的

本稿は、前稿に引き続き、実験集合住宅 NEXT21 (以下、NEXT21) において中間領域が積極的に計画された2住戸(304住戸、305住戸)を調査対象として実施した日常生活における中間領域の住み方調査、温熱環境調査の結果を報告するものである。

本稿の目的は、305住戸(余白に棲む家)における住み方調査を通じて、305住戸における住み方から見た中間領域の意義を明らかにすることである。

2. 対象住戸の概要

2-1. 305住戸(余白に棲む家)における中間領域

305住戸(余白に棲む家、設計:竹原義二氏)では、居住者による学童保育や塾など、日常的に子供が集まり、居場所となる家をコンセプトとしている。住戸の中に室を入れ子状に配置し、残された空間を、「ウチとソト」が曖昧に連続した「土間」として計画されている。屋内側中間領域は住戸内で一続きの空間として回遊性を持たせた計画となっていることも特徴である。

2-2. 居住者の概要

居住者は保育園児2人乳児1人、夫、妻の5人家族である。妻は自宅の間室で学習塾を行っている。

3. 調査方法

本稿では、前稿と同様の3つの調査方法を採用している。①タイムダイアリー調査(居住者のある一日の生活行為、居場所、建具の開閉を30分ごとに記録する方法)、②住戸内の室温測定、③居住者へのヒアリング調査である。調査は、春期(5-6月)・夏期(8-9月)・冬期(12月)に分けて実施している。加えて305住戸では、④アンケート調査(居住者が考える自分の家の領域、生活行為を行う場所)も分析対象としている。

4. 生活行為と場所の関係から見た分析

前稿と同様に、居住者の生活行為のうち、設備依存的な

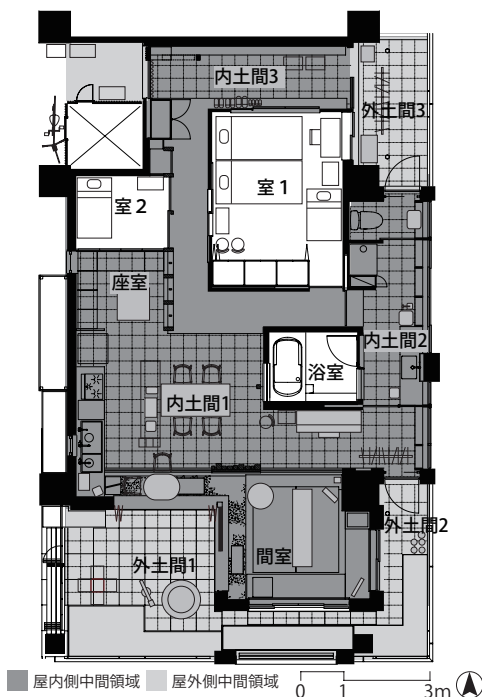


図1 305住戸平面図

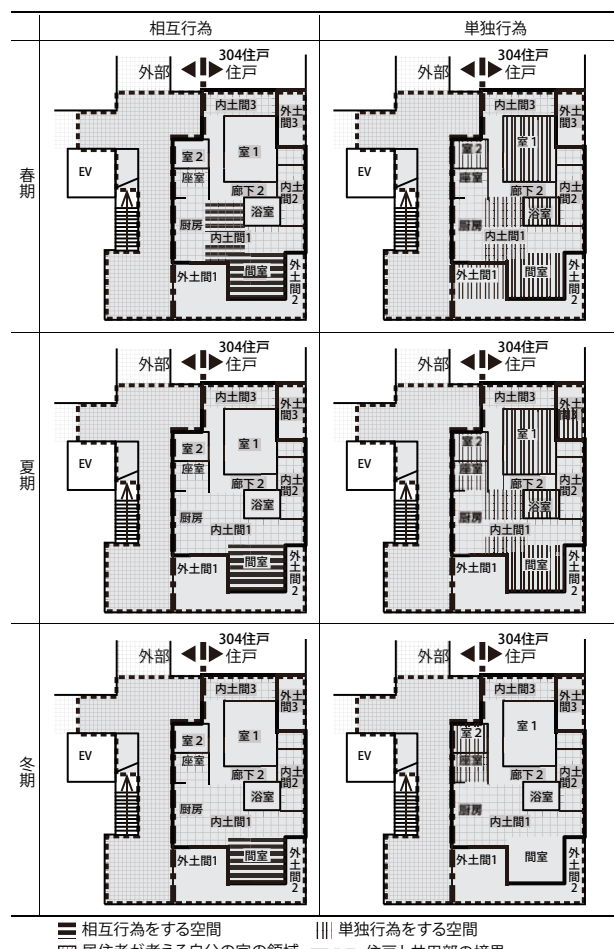


図2 相互行為と単独行為が行われる場所

A Study on the Intermediate Spaces in an Apartment House Part4

-Significance of the Intermediate Spaces Judged from the Residents' Lifestyle in 305 Dwelling of the Experimental House NEXT21-

DOI Shushi, TAKADA Mitsuo, CHIKAMOTO Tomoyuki, USHIYAMA Ayaka, KAMO Midori, SHIBA Toru

行為を除く単独行為、及び、複数人で来客と行う相互行為を分析対象とし、季節ごとに図2に示した。

4-1. 来客との相互行為が行われる場所

中間領域で行われる来客を伴う相互行為について見ると、立ち話は内土間③と外土間①という出入口に近いところで行われていた。訪問者との食事は内土間①で行われ、学習塾としては間室が利用されていた。屋内側の中間領域まで来客者との相互行為が入り込んでいる様子が確認された。また、季節による変化はあまり見られなかった。

4-2. 単独行為が行われる場所

中間領域で行われる単独行為については、春期と夏期には内土間①、間室といった屋内側中間領域が使われるとともに、夏期には外土間①といった屋外側中間領域も使われていた。一方で、冬期には単独行為が屋内側中間領域においても確認できず、室①、室②に限定されていた。季節によって単独行為の場所を使い分けている様子が確認された。

5. 季節ごとの建具の開閉

5-1. 建具の開閉パターン

305 住戸におけるタイムダイアリー調査の結果より、確認された建具開閉パターン 34 通り全てを抽出した (図 3)。

春期のみ 12 パターン、夏期のみ 13 パターン、冬期のみ 5 パターン、春・夏期共通 1 パターン、夏・冬期共通 2 パターン、全季節共通 1 パターンであった。季節間で共通の開閉パターンよりも各季節で特有の開閉パターンの方が多くあることが確認され、居住者が季節に応じて建具の開閉を変更している実態が把握された。

5-1. 各季節における建具開閉の特徴

各季節について見ていくと、春期には外側の建具を開放する傾向があり、外気を室内に積極的に取り入れようとしていることが窺える。夏期は、外側の建具を開放する場合と閉めきる場合の両方があることが確認でき、気温などに応じて居住者が選択していることが窺える。一方で冬期は、全てのパターンが外側の建具は閉めきっており、冷気を遮断しようとしていることが窺えた。

6. 結論

305 住戸における居住者は、訪問者との関係により相互行為を行う場所を変更し、季節の変化によって単独行為を行う場所を変更していた。建具の開閉についても、季節ごとに特有の選択が行われている実態が明らかになった。

生活行為を行う場所や建具の開閉に対する選択性が高いことが 305 住戸における中間領域の意義と言える。

季節	春期のみ				
開放	外土間1,3		外土間3	外土間3	外土間1,3
建具	室1,2,内土間2		室1,2,内土間2	室1	室1
平面図					
季節	春期のみ				
開放	外土間1,3	外土間1,3	外土間3	外土間1,3	外土間1
建具	室1	なし	なし	なし	室2
平面図					
季節	春期のみ		夏期のみ		
開放	外土間1,3		外土間3	外土間3	外土間1,3
建具	室1,2,内土間2		室1,2,内土間2	室1	室1
平面図					
季節	夏期のみ				
開放	外土間1	外土間1	外土間1,3	なし	なし
建具	室2,内土間2	室2	室1	室1,2,内土間2	室1,2
平面図					
季節	夏期のみ				
開放	なし	なし	なし	なし	なし
建具	室2	室2,内土間2	室1,内土間2	内土間2	室2
平面図					
季節	冬期のみ				
開放	なし	なし	なし		
建具	室1,2,内土間2	室1	室1,内土間2		
平面図					
季節	春・夏・冬期	春・夏期	夏・冬期		
開放	なし	外土間1,3	なし		
建具	なし	室1,2,内土間2	内土間2		
平面図					

図3 季節ごとの建具の開閉

* 1 立命館グローバル・イノベーション研究機構 研究員・博士 (工学)
 * 2 京都大学大学院工学研究科 教授・博士 (工学)
 * 3 立命館大学理工学部 教授・博士 (工学)
 * 4 株式会社リオ・ホールディングス 修士 (工学)
 * 5 大阪ガス株式会社 博士 (工学)
 * 6 大阪ガス株式会社

* 1 Researcher, Ritsumeikan Global Innovation Research Organization. Dr. Eng.
 * 2 Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.
 * 3 Prof., College of Science and Engineering, Ritsumeikan Univ., Dr. Eng.
 * 4 Rio Holdings co., Ltd. M. Eng.
 * 5 Osaka Gas co., Ltd. Dr. Eng.
 * 6 Osaka Gas co., Ltd.